Ⅴ　成果と課題

１　国語部から

（１）「話すこと・聞くこと」領域

＜成果＞

視点１「主体的・対話的に深く学ばせるための授業改善」について

ア　「つかむ・見通す」段階における思いや考えを持たせる工夫

・「友達や教師が提示するグループでの対話の仕方，スピーチやプレゼンテーション等を見て気付いたことを共有し，自分たちの活動を改善する」という学習の流れに児童が慣れてきており，導入段階で教師がモデルを示した時点で「何ができるようになればよいのか」に児童が気付き，教師が多くを語らなくても学習の見通しを持つことができるようになってきた。

イ　「解決する」段階における思いや考えを伝え合わせる工夫

・学習過程イメージ図や対話的な学びのモデル図を意識して指導に当たることで，友達の発言を受けて自分の考えや意見を述べる児童の姿を引き出すことができた。

・授業の終末に「最初は……と考えていましたが，○○さんの考えを聞いて△△△と考え直しました。(△△△のように考えが深まりました。)」という形で学びを振り返らせることを継続してきたことで，対話的に学ぶことが自分の考えを深めることに，多くの児童が気付くことができた。

視点２「自ら学ぼうとする学習意欲の構築」について

ア　「分かる喜び」を味わわせる習得と活用の場の工夫

・友達と話し合うことのよさを実感させるために話し合ったことを学級や児童会での話合い活動，帰りの会でのスピーチ活動等，学校生活で実際に生かす場面を工夫してきたことで，自分たちの話合いに足りなかったことに児童が自ら気付き，次の話合いを改善しようとする様子が見られた。

＜課題＞

視点１「主体的・対話的に深く学ばせるための授業改善」について

イ　「解決する」段階における思いや考えを伝え合わせる工夫

・友達や教師が提示するモデルを見る観点がぼやけてしまうことがあった。モデル提示の目的や意図をはっきりさせ，学年の発達段階や学級の実態に応じて見る観点（話題が逸脱していないか，問題の原因が明らかになっているか，聞き手の質問や感想の述べ方は適切か，司会の進め方はどうか）を与えてモニタリングをさせるようにしたい。

・話合いの司会を育てるために今後は司会のモデルを教師が示す場面も必要と考える。予想される意見が出されなかったときに「どう切り返していくか」「ど

のように働き掛けていくか」を司会者のスキルとして児童に気付かせていくようにしたい。

ウ　「確かめる」段階における学びの成果を実感させるための工夫

・記述させた授業の振り返りを読むと,「次はもっとよい話合いにしたい」「話の聞き方に気を付けたい」という記述はあるものの，本時の学びの何をどう次に生かすのかは書けておらず，具体性に欠ける児童もいた。本時の学習で導き出した話合いの約束や話し手・聞き手が気を付けるべきことを確認してから学びの振り返りをさせるようにすることで改善していく必要がある。

（２）「読むこと」領域

＜成果＞

視点１「主体的・対話的に深く学ばせるための授業改善」について

イ　「解決する」段階における思いや考えを伝え合わせる工夫

・個の考えを対話を通して深めたり広げたりする場面を意図的に設けるようにしたことで，友達の読み取ったことを参考にして更に深く登場人物の心情を読み取ることができてきている。

・自分が読み取ったことを一文で適切に表現しようとする姿と自分が書いた一文と友達が書いた一文を積極的に比較し，熱心に対話する姿が見られるようになった。

ウ　「確かめる」段階における学びの成果を実感させるための工夫

・単元の初めに書かせた一文と単元の終末に書かせた一文を比較することで読み取りが深まったことに気付かせ，友達と対話的に学ぶことのよさを実感させることができた。

視点２「自ら学ぼうとする学習意欲の構築」について

イ　「もっと知りたい」を引き出す家庭学習の工夫

・中心人物の変容に着目した読み取り方を身に付けた児童は並行読書してきた物語文を一文で表現し，学級の友達に紹介できるようになった。家庭学習でも教科書に掲載されているこれまでに読んだことのある物語文を読み，一文で表現する児童もいた（第４学年)。

・学習内容と関連した家庭学習に取り組ませ，児童が家庭学習で読み取ったことを本時の課題設定や課題解決の場面で生かすことで，家庭でも主体的に学ぼうとする児童が増えてきている。児童が家庭で学習してきたことを授業前に担任が把握できるように工夫し，全体の前で取り上げることで「自分が考えたことがみんなの学びの役に立っている」という経験を多くの児童に積ませていきたい。

＜課題＞

視点１「主体的・対話的に深く学ばせるための授業改善」について

イ　「解決する」段階における思いや考えを伝え合わせる工夫

・対話的な学びを通してグループの考えをまとめることで，個の児童の優れた考えがグループの考えとして反映されないことがあった。

・「物語文の内容の大体を一文で表現すること」が，低学年児童の「想像しながら読むこと」を妨げてしまうこともあった。深い学びに迫るための手立ての一つとして，全ての学びに取り入れるのではなく，単元の学習の目的や意図に応じて取り組ませていくようにしたい。

・登場人物の心情を捉える場面では叙述を基にして考えの根拠を述べることができず，中学年の段階でも自分の想像で登場人物の心情を考える児童がいる。対話的な学びの場面で読み取ったことを伝え合った後にもう一度本文に立ち返って考えさせるような指示・発問を工夫するようにしたい。

２　海洋教育部から

＜成果＞

視点１「主体的・対話的に深く学ばせるための授業改善」について

ア　「つかむ・見通す」段階における思いや考えを持たせる工夫

・海で起きている自然事象や，海に関する新聞記事を授業の導入で扱うことで，課題意識を強く持たせることができた。教師からの指示を待たずに疑問や気付きを友達と共有しようとする児童が増え，児童が対話を通して自ら課題を発見する姿も多く見られるようになった。

イ　「解決する」段階における思いや考えを伝え合わせる工夫

・教科・領域を横断する海洋教育の実践を通して，児童が自ら学びのつながりを見いだすことが多くなってきた。高学年では海洋を取り巻く様々な環境問題に興味を持つ児童が多くなり，単元の終末に書かせる意見文や個人レポートの内容から気仙沼市の海を守ろうとする思いの高まりを感じることができた。

視点２「自ら学ぼうとする学習意欲の構築」について

ア　「分かる喜び」を味わわせる習得と活用の場の工夫

・日本財団並びに東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センターによる海洋教育パイオニアスクール事業を活用することで，単元のねらいの達成に向けた校外学習や特別授業を実施・計画し，児童に海に関わる多様な体験を積ませることができている。海に関する話題に興味を持つ児童が増え，新聞に掲載されている記事や資料を家庭学習で読み取り，自分の考えを記述する児童も多くなった。

・単元の中に課題解決に向けて児童が必要だと考えた企業見学や体験学習を位

置付けることで，ねらいの達成に向けて児童がこれまで以上に主体的に目的をもって学ぼうとする姿が多く見られるようになった。

＜課題＞

視点１「主体的・対話的に深く学ばせるための授業改善」について

ア　「つかむ・見通す」段階における思いや考えを持たせる工夫

・児童に自ら課題を見いださせることや解決までの見通しを持たせることを重視することで，導入段階に時間がかかりすぎてしまうことがある。今年度作成した各学年の重点を活用し，どんなねらいでどの学習内容をつないでいくかを授業者が明確に押さえることで指示や発問，資料提示の仕方を改善していきたい。

視点２「自ら学ぼうとする学習意欲の構築」について

イ　「もっと知りたい」を引き出す家庭学習の工夫

・家族に水産業従事者がいる家庭が少なく，家庭学習は配付した資料の分析や考察といった内容が多くなった。週末や長期休業を利用した地域の人と関わる調査活動も今後は計画し，カリキュラム・マネジメントしていくようにしたい。

３　授業研究部から

①職員の協働による授業研究会の実施について

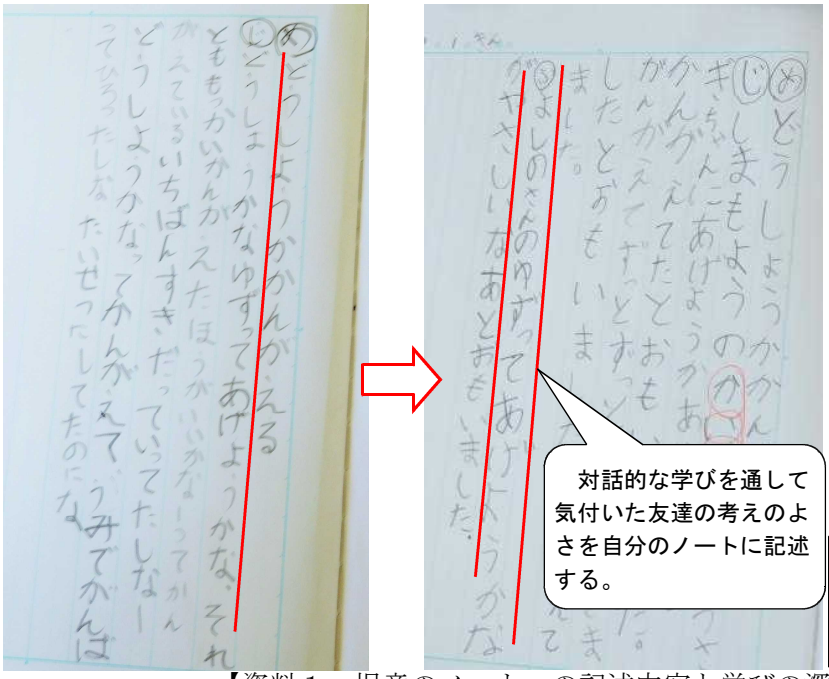
授業研究会に当たっては研究組織を生かし，チームとして事前検討会を行うようにしてきた。授業者が指導案を作成する前の段階でプランシートを基に部会で意見交換をする時間を設けたことで，部会に所属する職員が共通の思いの下で教材研究や学習過程の検討に主体的に参加することができた。

今後も段階的な事前検討会や授業実践後の事後検討会を実施し，実践の成果・課題を職員全員の学びにしていきたいと考える。

【写真１　事前検討会の様子】

②児童の対話的な学びの深まりについて

学習過程の「解決する段階」に位置付けた対話的な学びによって，児童に思いや考えが広がったり深まったりする経験を積ませることができた。対話の方向性を明確にした指示や発問ができるように教師の言葉や働き掛けを今後も協働的に磨いていきたい。



自分の考えを持つ
⇩
対話的な学び（「比較」「選択」「融合」「拡大」）による新たな気付きと考えの共有
⇩
深い学びの実現

【資料１　児童のノートへの記述内容と学びの深まり】

③教職員の授業づくりへの意識改革について

昨年度から授業改善アンケート（毎学期実施，教職員対象）を実施し，職員の授業づくりへの意識の向上を図ってきた。授業改善アンケートの質問項目は学習過程イメージ図に示した４つの段階（「つかむ・見通す」「解決する」「確かめる」）において，授業者が意識すべきことを宮城県教育委員会から示されている「学力向上に向けた５つの提言」を基に設定した。授業実践に当たる全ての教員が自分の授業を自己評価することで，日常的に授業の質を高めようとする教師集団を今後も目指していきたい。

（質問項目やアンケートの結果の分析については「調査資料部から」のページに掲載）

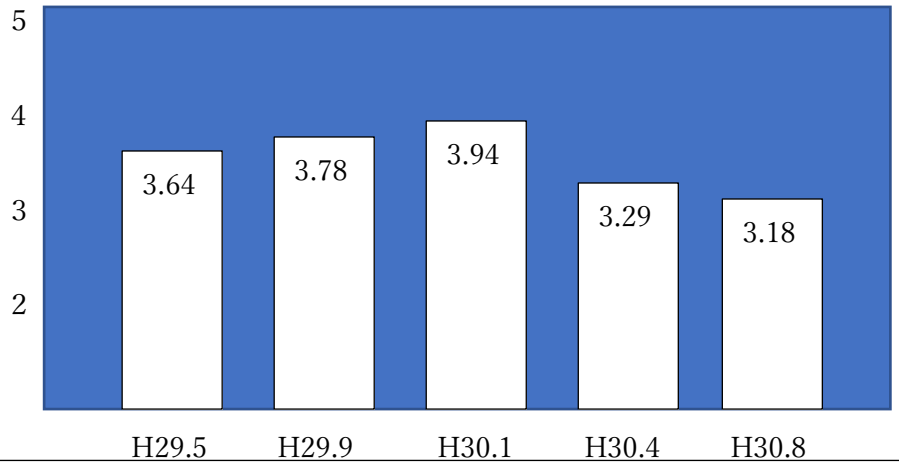
４　調査資料部から

（１）授業改善アンケート（学期１回実施，教職員対象）

全職員を対象に実施している授業改善アンケートの質問項目から，質問項目を抜粋し，結果を分析した。職員は普段の授業実践を振り返り，５段階の数値評価をして回答した。

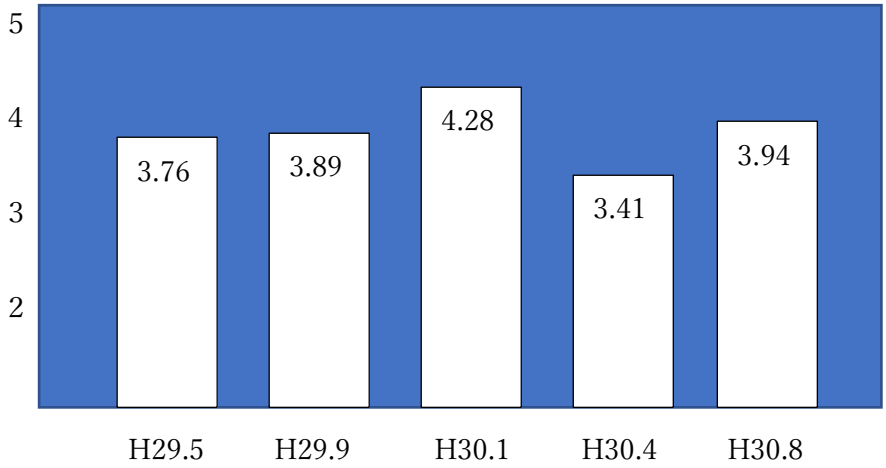
グラフ上の数値は職員が選択した回答の平均値を表している。

設問１「児童が自ら問いを見いだす（課題を発見できる）よう教材や発問を工夫していますか。」



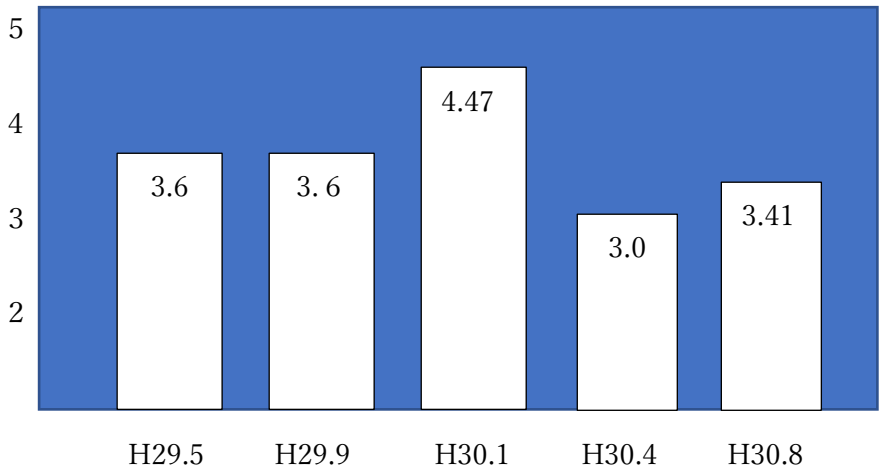
教師から学習課題を一方的に提示するのではなく，児童との対話を通して設定することを授業者みんなで意識してきた。これまでの研究成果物を活用したり，職員同士で授業を参観して学び合うことを通して，年度当初から全職員で意識できるよう改善を図っていきたい。

設問２「児童が学習の見通しを持つよう工夫していますか。」



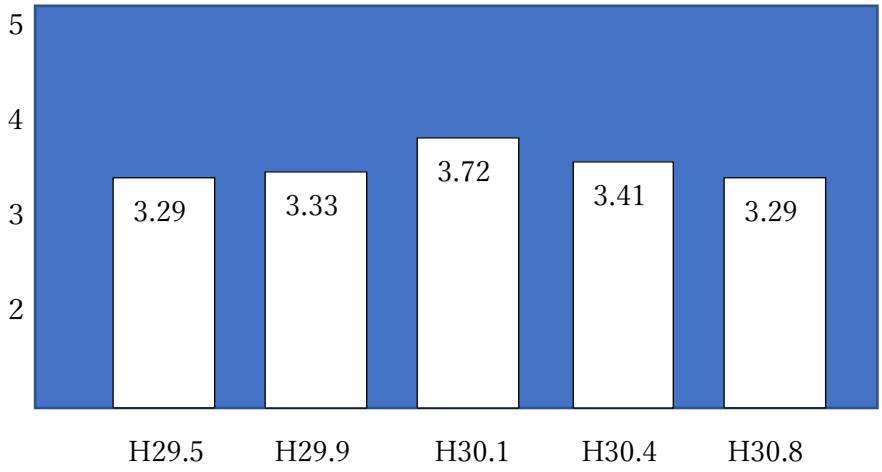
授業の導入時は児童にこれまでの学習と今日の学習の違いに気付かせるようにし，「何ができるようになればよいのか」を児童に意識させるように心掛けてきた。平成３０年度も授業研究会での話合いを経て，職員の意識が改善されつつある。

設問３「児童一人一人に自分の思いや考えを伝え合わせる時間を設定し，その在り方を工夫していますか。」



平成２９年度は３回目の調査で数値が大きく伸びた。職員が入れ替わった平成３０年度も数値が伸びてきている。対話的な学びのモデル図を作成し，活用してきたことの成果と捉えている。対話の方向性を４つに類型化したことで教師の指示や発問が明確になった。教材研究や協働的な授業づくりの場において，今後も教師の働き掛けに磨きを掛けていきたい。

設問４「児童一人一人に学びの成果を実感させる時間を確保し，その在り方を工夫していますか。」



確かめる段階では「何が分かったか」ではなく「友達と対話することで何ができたか」に着目して本時の振り返りを記述させるようにしてきた。児童のノートへの記述内容を分析すると，友達と対話することのよさを実感している児童が増えてきていることが分かった。

学びの成果を児童に実感させるためには，授業中に教師が児童の考えの変容や深まりを見取り，その場で認めていくことも重要と考える。教材研究の中で授業中の教師の働き掛けを具体的に構想していくようにし，改善を図っていきたい。

以上の結果から，本校職員の授業改善への意識は着実に向上していると考えることができる。今後も研究成果物である「学習過程イメージ図」「対話的な学びのモデル図」を普段から意識・活用し，授業改善を図っていくようにしたい。

特に課題発見から課題解決までのプロセスの中で最も大切に扱ってきた「対話的な学び」については，今後も授業改善の大きな柱として職員で意識していくようにしたい。

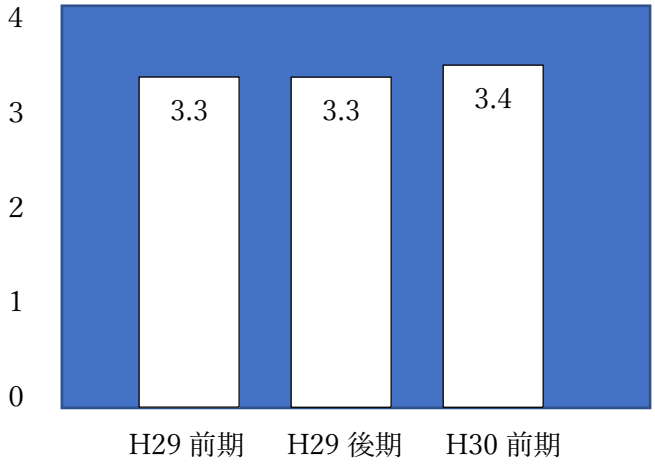
【授業者の目に入る所に掲示したモデル図】

（２）学校評価アンケート（年２回実施，保護者対象）の結果から

全校児童の保護者を対象に実施している学校評価アンケートの質問項目から，児童の家庭学習への取組の様子についての質問項目を抜粋し，結果を分析した。保護者には質問項目に対し，「４そう思う」「３どちらかと言えばそう思う」「２どちらかと言えばそう思わない」「１思わない」の４つの選択肢から１つを選んで回答していただいた。

グラフ上の数値は保護者が選択した回答の平均値を表している。

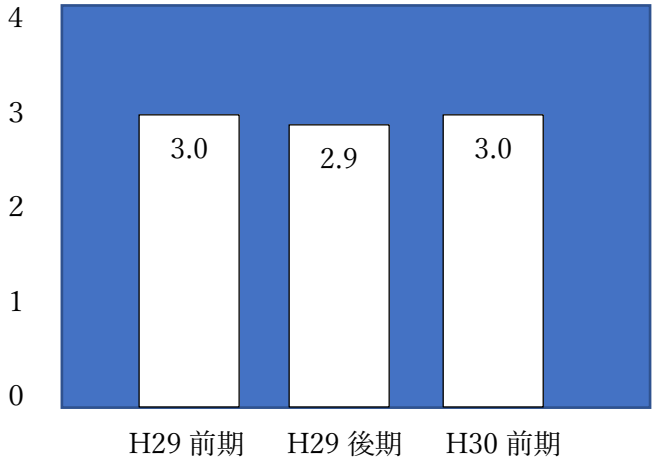
設問６「お子さんは毎日家庭学習をしていますか。」



いずれの調査でも選択肢の平均値は高くなっている。

毎日家庭学習に取り組んでいると回答した保護者の割合は８５％を越えており，家庭学習の習慣が概ね身に付いていると言える。「気小っ子はなまるカード」で学びの記録を累積したり，各学級で継続して声掛けしてきたことの成果と考える。

設問５「お子さんの家庭での勉強を見てあげることはありますか。」



選択肢の平均値はおよそ３で推移している。

家庭での勉強を見てあげることができていると回答した保護者の割合はいずれの調査においても高いとは言えず，平成２９年度後期の調査では約７０％にとどまっている。

この結果から，今後は家庭学習の習慣の定着を目指すとともに，家庭との連携を更に密にしていく必要があると考える。現在本校では家庭学習での優れた取組を紹介するために，各担任が教室や廊下に児童の家庭学習ノートのコピーを掲示するようにしている。今後は各種通信や学校ホームページ等を活用したり授業参観後の学年懇談会の中で家庭学習の話題を取り上げたりすることで，保護者にも家庭学習の内容に関心を持ってもらうように働き掛けを工夫していく必要がある。

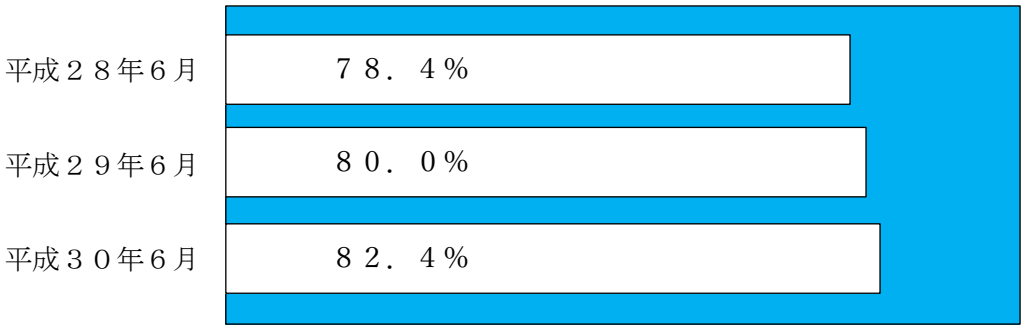
（３）実態調査アンケート（年２回実施，児童対象）の結果から

実態調査アンケートは全国学力・学習状況調査の児童質問紙を基に，「学習に対する関心・意欲・態度はどうか」「どのように学んでいるか」「学習の有用性を感じているかどうか」の３つの柱を設けて調査を続けた。それぞれの柱から質問項目を抽出し，「そう思う」または「どちらかと言えばそう思う」と回答した児童の割合の経年変化から以下のように考察した。

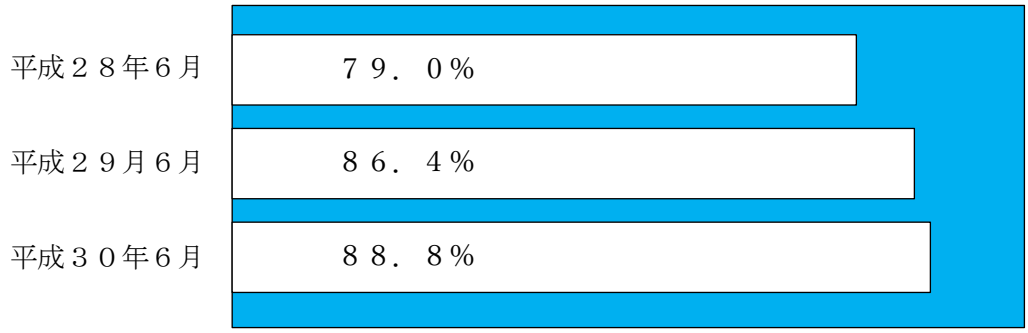
（ア）国語科について

柱１【学習に対する関心・意欲・態度】

設問１「国語科の学習は好きですか。」（１～６年）



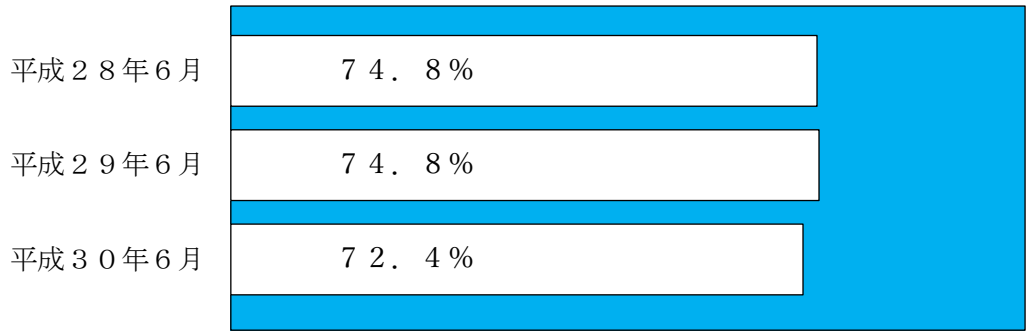
設問４「読書は好きです。」（１～６年）



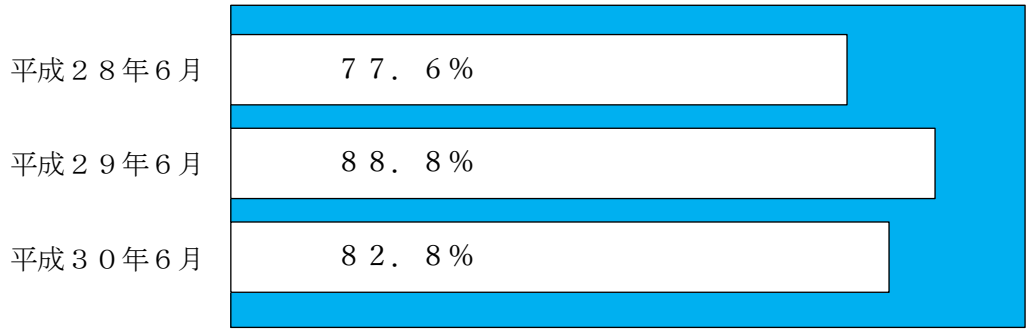
国語科の学習を好む児童の割合は増えてきている。「読むこと」の指導において並行読書に取り組ませ，多くの物語文の世界を味わわせてきたことで，読書を好む児童も増えてきている。今後は気仙沼図書館との連携を更に強め，「こんな作品が読みたい」という児童の思いを実現していきたいと考える。

柱２【学び方】

設問７「発表内容がうまく伝わるように話の組立を工夫しています。」（３～６年）



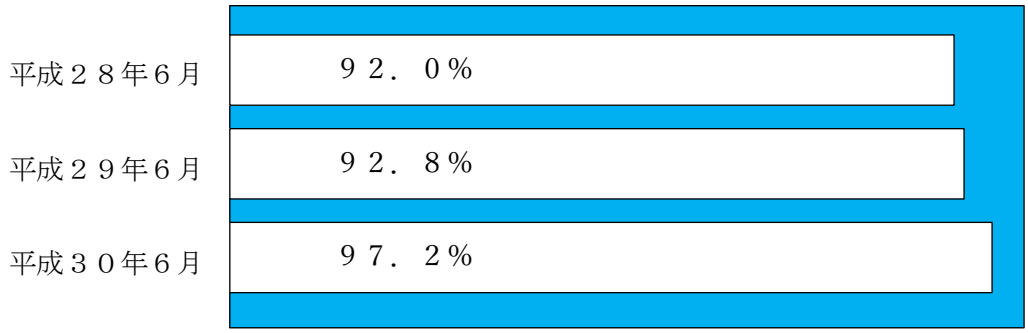
設問９「段落や話のまとまりごとに内容を理解しながら読んでいます。」（１～６年）



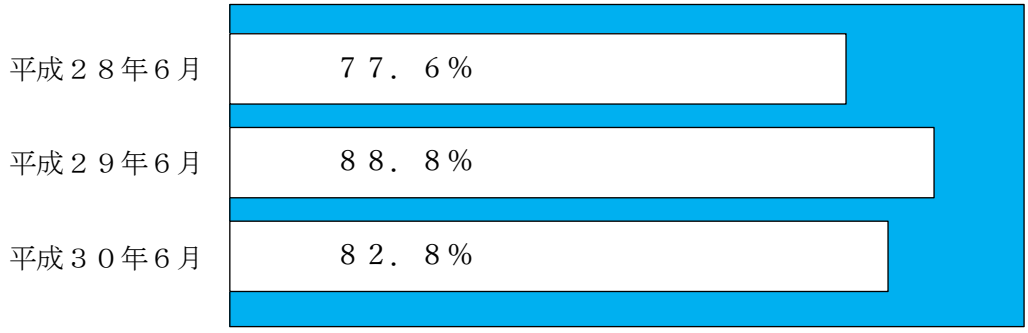
設問７では「当てはまる」または「どちらかと言えば当てはまる」と回答した児童の割合が学年によってはあまり伸びなかった。しかし，基本的な話型を提示したり，教師がスピーチのモデルを示したりすることで，自分の話し方を改善しようとする児童の姿が見られるようになってきている。「読むこと」については指示や発問を工夫したり，焦点化した音読に取り組ませたりすることを通して，要点を押さえながら読む習慣付けを図っていくようにしたい。

柱３【学習の有用性】

設問２「国語科の勉強は大切です。」（１～６年）



設問１０「国語科の勉強は将来社会に出たときに役に立つと思います。」（１～６年）

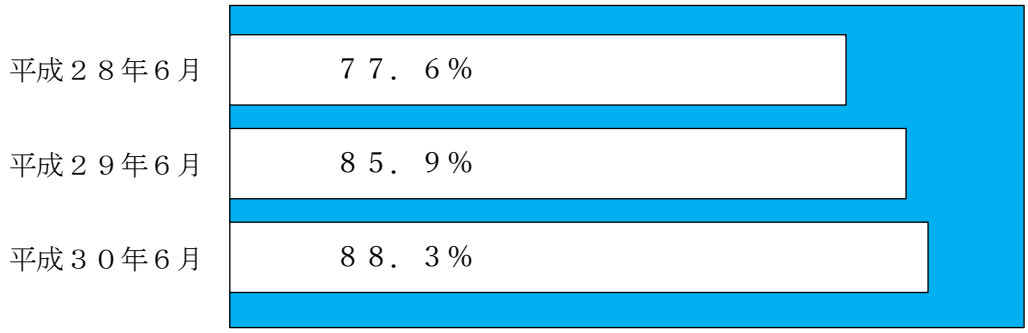


国語科の学習を大切だと考えている児童は多い。国語科に限らず，「課題解決に向けて対話的に学ぶこと」「対話を通して自分の考えが深まったかどうかを振り返ること」を積み重ねてきたことの成果と考える。今後も様々な教科・領域の授業に方向性を明確にした対話的な学びを位置付けることで国語科の学びの深まりを目指すようにしたい。

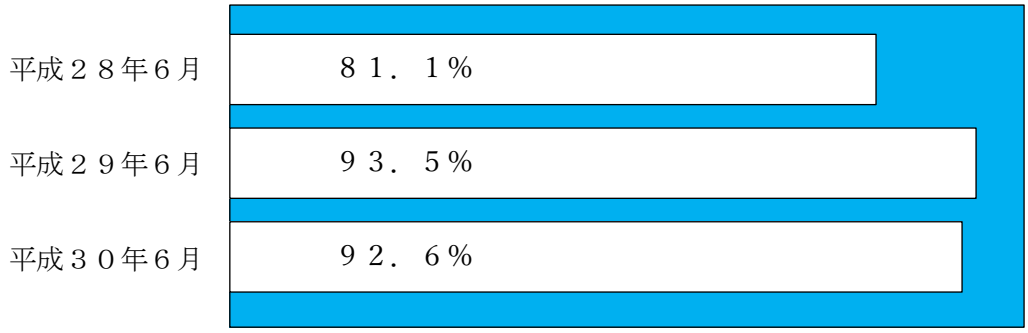
②海洋教育について

柱１【学習に対する関心・意欲・態度】

設問１「海に関する勉強が好きです。」（１～６年）



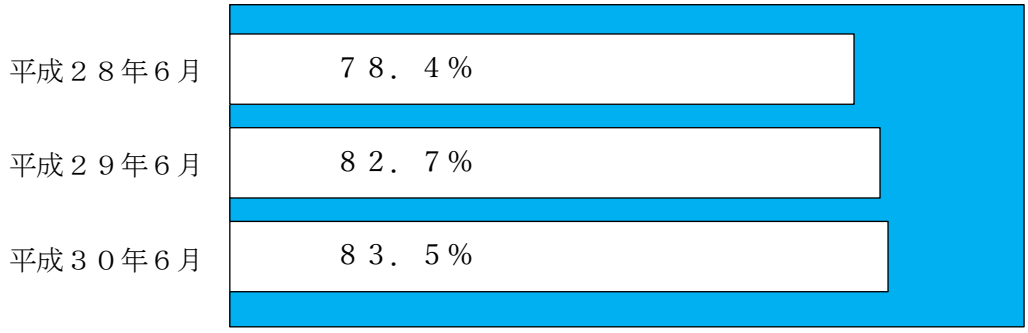
設問４「海に関する調査（観察や実験）が好きです。」（３～６年）



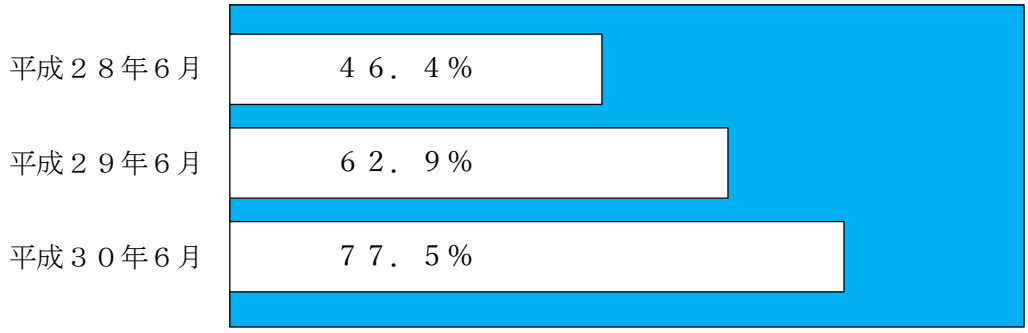
海に関する学習への本校児童の関心は非常に高い。平成２８年度末に「海洋教育クロスカリキュラム」を校内で作成して活用し，様々な教科・領域の学習内容のつながりを意識して実践を積み重ねてきたことの成果と捉えている。今後も教科・領域を横断する海洋教育の実践を心掛け，主体的に学ぶ児童の姿を引き出すようにしていきたい。

柱２【学び方】

設問７「観察や実験，調査の結果からどのようなことが分かるのかを考えています。」（３～６年）



設問９「自分の考えを友達や地域の方に説明したり発表したりしています。」（３～６年）



海洋教育に関する調査（特に観察や実験）では，結果と考察を分けて課題を解決していくことを継続して意識してきたことで，考えたことを書いたり話したりすることができる児童が増えてきた。課題解決の手段の一つとして友達との対話的な学びを位置付けたことや，地域で働く方と関わる施設見学を位置付けるようにしてきたことで，自分の思いや考えを他者に伝えようとする児童の姿もこれまで以上に見られるようになってきている。

柱３【学習の有用性】

設問２「海に関する勉強は大切です。」（１～６年）

設問１１「海に関する学習は将来社会に出たときに役に立つと思います。」（３～６年）

気仙沼市の水産業や海を中心とした自然環境に目を向けてきたことで，児童に海に関する学習の有用性を実感させることができた。学習の振り返りには「魅力を発信したい」「海を守りたい」といった記述が多くなり，郷土に貢献しようとする思いを児童に持たせることができたと考えている。

（４）児童の学力・学習状況の変容から

①全国学力・学習状況調査の結果から

ア　国語Ａ問題（主として知識）について

学習指導要領に示された領域別に本校の児童の正答率と全国平均の正答率を経年比較すると，平成３０年度の調査までに「読むこと」に関する問題の正答率が全国平均の正答率に近付いてきている。漢字の読み書きに関する問題

の正答率は平成２９年度までに全国平均の正答率を上回るようになった。しかし今年度の調査では出題の趣旨が「漢字を正しく読む」,「漢字を正しく書く」から「漢字を文の中で正しく使う」と変更され，正答率は複数の問題で全国平均を下回る結果となった。

イ　国語Ｂ問題（主として活用）について

児童の解答状況を設問ごとに見ていくと，平成２９年度は「目的や意図に応じて必要な内容を整理して書くこと」「目的や意図に応じて引用して書くこと」，平成３０年度は「目的に応じて複数の本や文章を読むこと」を趣旨とした設問の正答率が全国平均を上回った。このことは課題解決のために対話的に学ぶことを通して，相手の意図を汲み取って聞こうとする姿勢や自分の考えがよく伝わるように書いたり話したりしようとする態度が育成されたことの成果と捉えている。一方で，平成３０年度は「他者の意見のよさを取り入れて自分の意見を持つこと」や「他者の話から分かったことを取り入れて自分の考えを書くこと」についての正答率が全国平均を下回る結果となった。対話を通して気付いたことや新たに考えたことを，その後の活動にどのように生かしていくとよいのかに気付かせるような取組が必要と考える。

ウ　算数Ａ問題（主として知識）について

算数科では平成２８年度から「図形」領域の問題の正答率が低くなっていた。このことを受け，複合図形を分割して面積を求める場面や，未習の図形の面積を既習の図形の求め方を使って求める場面においてＩＣＴを活用し，児童の考えを可視化するようにして授業改善を図ってきた。平成２９年年度の調査では平行四辺形や三角形の底辺と面積の関係を答える問題の正答率が全国平均の正答率を上回った。しかし，平成３０年度の調査では分度器を正しく用いて１８０°よりも大きい角の大きさを求める問題の正答率が全国平均の正答率を下回る結果となった。

エ　算数Ｂ問題（主として活用）について

算数Ｂ問題については，日常生活の事象における数学的な表現の活用と解釈に課題が見られる傾向がある。本研究で日常生活の事象を問題場面として扱ったり，学習したことを実際の学校生活の場面に生かしたりすることを継続してきたところ，日常生活に関連する問題場面を適切に捉え，図や表を自分で工夫して描いて正答を導き出す児童が増えた。平成２８年度の調査では，式の中で使われている数値の意味を適切に捉えることができない児童が目立ったが，平成２９年度の調査では同様の趣旨の問題における正答率が全国平均の正答率を大きく上回る結果となった。平成３０年度の調査では，数値の意味

だけでなく数量の関係まで捉えて答える問題が出題されたが，全国平均の正答率とほぼ同等の結果が得られた。

オ　児童質問紙調査について

授業改善に努めようとする教師の意識改革により，平成２９年度から「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思いますか」という質問に対する質問に「そう思う」と解答する児童の割合が大きくなり，平成３０年度の調査では全国平均を大きく上回る結果となった。

学習については「学級の友達との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができていますか」という質問に対して「そう思う」と解答した児童の割合が大きくなってきており，方向性を明らかにして対話的に学ばせてきたことの成果と考えられる。一方で，平成３０年度は「自分の考えがうまく伝わるように工夫して発表している」という質問に「そう思う」と解答した児童の割合が全国平均の割合よりも下回っており，今後も授業の中で児童に発表の機会を多く与えるとともに，資料や文章，話の組み立てなどをどのように工夫すればよいのかを具体的に示していく必要がある。海洋教育を通して地域の海に関することを調べたり，海で働く方と関わったりする機会が増えたことで，地域や社会で起きている出来事に関心があると解答した児童の割合も高まってきている。

（イ）教研式学力標準検査（ＣＲＴ－Ⅱ）の結果から

平成２７年度から平成２９年度までに実施した教研式標準学力検査（ＣＲＴ－Ⅱ）の結果を分析すると，平成２７年度まで現５年生の国語科の正答率は全国平均の正答率を下回っていたが，平成２８年度，平成２９年度の正答率はどちらも全国平均の正答率を大きく上回る結果となった。現３年生の正答率も平成２８年度は全国平均を下回っていたが，平成２９年度はほぼ同等の正答率となった。現４年生と現６年生に関しては「話すこと・聞くこと」の領域の正答率に伸びが見られた。

平成２９年度まで研究教科としていた算数科については，平成２７年度時点では多くの学年で全国平均をやや下回っていたものの，平成２９年度の検査では全国平均の正答率とほぼ同等の結果となった。学年や領域によっては全国平均の正答率を大きく上回る結果も得られている。

「話すこと・聞くこと」「読むこと」の領域の学習に重点を置いて研究を推進してきた平成３０年度も１月に検査の実施を予定している。今年度の結果についてもこれまでの結果と比較し，児童の学力の変容を考察するようにしたい。

５　今後の学力向上に向けて

以上のような本研究の成果と課題を受け，今後は研究の視点に沿って次の点に留意しながら教育活動に当たり，研究の深化・発展とともに児童の更なる学力向上を図っていきたい。

視点１「主体的・対話的に深く学ばせるための授業改善」について

ア　「つかむ・見通す」段階における思いや考えを持たせるための工夫

・児童が自ら問いを見いだすことができるように，対話のモデルを提示することや身の回りで話題になっている出来事を活用することを重視して問題場面を提示する。

・「何ができるようになればよいのか」「どのような活動が必要なのか」という学習活動の見通しを児童に持たせるために，具体的で分かりやすい学習課題を児童の思いを生かして設定する。

イ　「解決する」段階における思いや考えを伝え合わせる工夫

・課題解決につながる対話的な学びを実現させるために，対話的な学びに取り組ませる場面での教師の働き掛けについて吟味を重ね，「どんな方向性で対話させるか」「どんなつぶやきを取り上げて全体で共有するか」を明確にして授業に臨むようにする。

・他者の話から分かったことを取り入れて自分の考えを持ったり，自分の考えを書いたりすることができるように，友達と対話をしたことを基に自分の考えを書き直したり，修正を加えたりする活動に取り組ませていく。

ウ　「確かめる」段階における学びの成果を実感させるための工夫

・授業の振り返りを記述させる際は，「自分の考えが友達との対話によってどう変わったか」「自分の考えを友達に分かりやすく伝えることができたか」という観点を与え，学びの成果を記述させるようにする。

視点２「自ら学ぼうとする学習意欲の構築」について

ア　「分かる喜び」を味わわせる習得と活用の場の工夫

・児童の学習活動のよさを見取り，授業の中で称賛することを継続していく。

・児童が抱いた課題，地域の実情，単元のねらいを考慮した上でカリキュラム・マネジメントを進め，自ら学ぼうとする児童の姿を引き出していく。

イ　「もっと知りたい」を引き出す家庭学習の工夫

・新出漢字の指導の仕方や家庭学習への取り組ませ方を工夫し，学習した漢字，慣用句，ことわざ等の言語を実際に作文を書く場面や日常生活の場面で活用していくことを重視していく。その際，主語と述語の関係に注意して文章を書いたり話したりするように意識付けを図るようにしていく。

・学校と家庭との学力向上面での連携を密にして保護者にも家庭学習の内容に興味を持ってもらうように，学校ホームページに優れた家庭学習のノートを掲載する機会を定期的に設けるようにする。